

本と話題

「望む死」を迎えるには…

安岡 芙美子

高齢社会は多くの人が亡くなる多死社会でもある。わが国の2016年の死亡者数は130万人を突破、一日に平均で3500人以上が亡くなっている。死亡者の90%以上は65歳以上の高齢者である。半数以上の人は自宅で最期を望んでいるが、病院死亡が多数派である。

最期の意思決定

共同通信生活報道部による『ルポ 最期をどう迎えるか』(岩波書店・1400円)は多くの実例を取り上げ、死に関する諸問題を提起している。自宅での死亡、施設での死亡、認知症の場

合、救急医療の現場での問題点等々である。そのなかで特に問題となるのは発病後の医療と最期をどうするか、延命するかどうかなどの意思決定である。



ある。これは患者をとりまく諸条件によっても左右され、病気の段階によっても揺れ動く。

日頃からこの問題を話し合っている本人・家族は希少であるし、緊迫した場面では普段の思いとは逆の意思決定をすることもあり得る。この課題に対して、終末期医療について患者・家族・医療従事者が繰り返し話し合うACP(アドバンス・ケア・プランニング)という手法が紹介されている。

地域の輪の中で

花戸貴司著『最期も笑顔で』(朝日新聞出版・1400円)は花戸医師が滋賀県の山間部にある永源寺地域における在宅

死の実践をまとめたものである。高齢化率34%を超える永源寺地域において、約半数が在宅死を迎える。家族がいる人もいれば、独り住まいの人も

いる。医療・介護などの関係者の連携も功を奏しているが、なによりここは地域社会のきずなが機能しており、誰かが寝込むようになって近所の人や毎日のように集まり、自然な形で手伝い、死ぬまで地域の人の輪の中で過ごせることである。患者の病状だけを診るのではなく、生活者として捉え大切にする著者のまなざしはやさしく感動的である。

悲嘆から回復へ

玉地任子著『ホスピス

医が自宅で夫を看取るとき』(ミネルヴァ書房・1800円)は長年ホスピス医を務めた女医が同じく医師である夫をがん

で亡くすが、その在宅での看取りと、死亡後の悲嘆から回復する過程を著したものである。患者の立場になって初めて分かる患者のつらさや思いに動揺するが、最後に支えたのも専門家としての自分の存在だった。

多死社会のなかで自分の望む死を迎えるには考えておくべき問題は多い。本人の意思、家族の判断、医療・介護・福祉などの体制の整備、地域社会の在り方、経済状態などである。死をタブーとするのではなく日頃から関心をもち備えることが大事である。

(やすおか・ふみこ)
元十文字学園女子大学教員

日頃から関心持ち備えを

ユニクロ潜入一年

六輔五・七・五